

《隠 謀 学》入 門

村 岡 潔

〔抄 録〕

本稿は、筆者の造語である「隠謀学」についての最初のイントロダクションです。隠謀学は、この世の日常茶飯事に満ち溢れている数々の隠謀（プロット）を解説するための一種の論理学であり、行動科学であり、文化的解剖学（アナトミー）です。また、性善説で生きている人に対する性悪説の世界観からのツッコミであり、人生において駆け引き上手になるための手引きでもあります。例えば、「金儲けの話」「死ぬまで保障される保険」「骨董屋の店先の掘り出し物」「水子供養のための金の仏像」「健康食品」などのうまい話は、すべて隠謀の可能性を秘めているからです。むしろ、隠謀学は、日常生活に隠された罠を見抜くためにこそあれ、逆に隠謀力を増進するためのものでもありません。本文では、事例を踏まえながら、隠謀主義の特徴である「錯覚化」「モデル化」「権威的錯覚化」「偶然化」などの作用について解説し、最後に簡単に脱隠謀化の処方箋を提示しました。

キーワード：隠謀学、性悪説、性善説、モデル、医療・ヘルスケア

「作り話が終わるのは、作り話だということがはっきりと一般大衆に暴露されたときだけだ。そうならないこともしょっちゅうある。少数の専門家が気づいたとしても、一般大衆が気づかなければ大半の人々は騙され続けていることになるからだ。」

(G・スタイン：2000)

は じ め に ～〈隠謀学〉とは

「インボウ」という言葉の意味は、『広辞苑』（第4版）によると「陰謀・隠謀」という見出し語で示され、「① ひそかにたくらむばかりごと。謀叛の計略……。② 〔法〕二人以上の者が犯罪行為を謀議すること。」であり、『デジタル大辞泉』でも同様に説明されています。一方、

『プログレッシブ和英中辞典』で「陰謀」を引くと ‘a plot, an intrigue; [共謀] (a) conspiracy’ となっています。「隠謀」の項目は和英辞典にはありません。

そこで『オックスフォード現代英英辞典』を逆引きすると、

- a) ‘plot’ は、‘1 the series of events which form the story of a novel, play, film/movie, etc. 2 a secret plan made by a group of people to do something wrong or illegal [SYN] CONSPIRACY ;
- b) ‘intrigue’ は、‘1 the activity of making secret plans in order to achieve an aim, often by tricking people 2 a secret plan or relationship, especially one which involves somebody else being tricked’ ;
- c) ‘conspiracy’ は、‘a secret plan by a group of people to do something harmful or illegal’ と解説されています [下線, 引用者]。

本稿では、「隠謀」は、上記の英英辞典の a) b) それぞれの下線部 1 の特色を前面に出す言葉とし、a) b) の 2 や c) のニュアンスをもつ場合の「陰謀」とは区別することにします。すなわち、「隠謀」とは、「ある目的を達成するために秘密裏の計画を立てること」であり、その目的は「小説・演劇・映画などの物語を構成するような一連の出来事」、言い換えれば、「人生や生活上の様々な出来事」を計画者の利害関心に沿った形で実現するためのアプローチを指すことにします。

たとえば、幼児がつくたわいもない嘘も「隠謀（プロット）」であり、医師ががん患者にがんと異なる病名を告げるのも「隠謀」的アプローチと言えるでしょう。いずれも、相手を何らかの形で欺くことによって自己の本懐を遂げようとするものだからです。また、計画者は必ずしも集団ではなくともよいし、大げさな目標をもつとも限りません。こうして日常生活の些細な駆け引きも、「隠謀」という側面から解釈が可能になるわけです。これは、「ミクロ」のレベル、つまり個々人に影響を与えるレベルを主に扱うことを意味します。

一方、「隠謀（プロット）」と「陰謀」とは峻別はできませんが、後者は、基本的に計画者は集団・複数であり、歴史的的政治的要素が大きく、獲得目標も大がかりなもので権謀術策の代名詞です。例えば、日本史における大化の改新や鹿ヶ谷の変、あるいは、太平洋戦争における真珠湾攻撃 [日本側は直前まで宣戦布告を伏せて奇襲する計画であり、米国側はそれを事前に察知していて奇襲させることで米国世論の参戦に傾ける意図があったともいう] が挙げられます。これらはマクロのレベルの「陰謀（コンスピラシー）」というべきもので、本稿では、原則として扱わないことにします。

さて、表題の「隠謀学 plottology」は、ともに筆者の造語です。隠謀学は、この世の日常茶飯事に満ち溢れている数々の隠謀（プロット）を解説するための一種の論理学であり、行動科学であり、文化的解剖学（アナトミー）です。あるいは、性善説で生きている人に対する性悪説の世界観からのツッコミであり、人生において駆け引き上手になるための手引きでもありま

す。例えば、「金儲けの話」「死ぬまで保障される保険」「骨董屋の店先の掘り出し物」「水子供養のための金の仏像」「健康食品」などのうまい話は、すべて隠謀の可能性を秘めているからです。むしろ、隠謀学は、日常生活に隠された罫を見抜くためにこそあれ、逆に隠謀力を増進するためのものではないことは、初めにことわっておきます。

以下、隠謀学的アプローチ（手法）としての解釈が可能なパターンをいくつか考えて検討していきましょう。

(1) 錯覚化とモデル化 ～隠謀主義の基礎

私たち人間（他の動物もそうでしょうが）は、感覚器官によって世界（外界と内界＝体内）を知覚し、そして中枢神経系の判断・指令を介して、専ら運動器官によって世界に働きかけて日々の生活をおくっています。この際に知覚された世界とは、その時の利害関心にしがたって切り取られた世界の切断面であり主体によって切り取られ加工（解釈）された一部分に他なりません。一般に、これが「情報（あるいは知覚情報）」と呼ばれるものです。

私たちは、生まれてから年を重ねるにつれ、瞬時に得られる複数の情報から世界を認識する術を徐々に会得していきます。やがて個々人は、（マイクロレベルでの）「世界観」を形成することになるわけですが、そのためには中枢神経系の中に認知のためのモデルの存在が必要になります。とは言っても人間は「諸関係の総体（アンサンブル）」[マルクス]ですから、このモデルは、その個人が暮らす大なり小なりの共同体（コミュニン）の人々とのかかわりの中で形成されるもので、一定程度の独創性とともにながりの共通性（共役性/通訳可能性）があります。したがって文化人類学などでは、この〈認知のためのモデルの総体〉は「慣習」などといった文化的レンズを構成します。これは、日本語的な言い方をすれば一種の色眼鏡なのです。

ここで大事なことは、例えば視覚によって世界を認知しますが、その「目に見えた世界」はすでに色眼鏡を通して見た「世界（の理解）」であり、決して外界それ自体、いわば「物自体（ding an sich）」を見ているわけではないことです。ユクスキュルら[ユクスキュル、クリサート：2003]は、このことを環境（werd）と環境世界（umwerd）という概念を使いわけうまく説明しています。つまり、人間は（生物も）、個々の閉ざされた環境世界に生きているに過ぎないのに、あたかも環境（外界）を認識しているかのように生きているということです。例えば、人間は、紫外線や赤外線を見ることができませんが、他の動物ではそういう波長を光を感知するものもいます。この場合、両者の見ている外界はかなり違ったものになっていると想われます。

そこで、隠謀学の基礎は、このことを自覚することから始まります。人間はつねに「錯覚」準備状態にあるわけです。隠謀の企図は、こうした錯覚や思い込みの準備状態を活用することにあるからです。とくに人間は、動物種の中では中枢神経系とりわけ大脳を発達させることに

よって、知覚が切り取ってきた世界の情報の欠如部分を補正する能力に長けている〔安斎育郎〕ので、このことが錯覚を起こす基礎になっているのです。

例えば、同じ大きさ形の長方形のカードが二枚重なっていて、下のカードの右上の角が一部見える場合、上のカードが白で、下のカードの見た一部が赤の時、おそらく多くの人は下のカードの全体も赤だと想像しやすいということです。奇術では、こうして観衆に見せたカードを裏返して見せて、表になったカードは何色かと尋ねます。ほとんどの聴衆がそのカードは「赤」だと信じ込んでいるのですが、もう一度ひっくり返すと実は「白」だったというわけです（この際、見えていた赤の部分を一瞬白いカードで隠します）。

このように手品は、隠謀（プロット）の一種です。でも多くの場合娯楽ですから目くじらは立てる必要はないですが、それを超能力と称し詐欺に利用するのは反倫理的行為です。

さて、脳内の「モデル」というパターンによって私たちは外界を認識すると述べました。

例えば、こういう話があります。先天性の白内障か何かで眼の水晶体が濁っていて視覚障害のあった人が大人になってから手術を受けて光を取り戻しました。ある時、動物園のゾウのオリの前で子供が「お父さんあれがゾウさんだよ」とその人に示しましたが、彼はゾウが即座には認識できなかったそうです。これは、父親にゾウのモデルがなかったことによると言えましょう。

筆者にも似たような幼児期の体験があります。小学校に上がる前のことでしたが、ある秋の夕方、あたりが暗くなった庭に出ていたとき、数メートル先の家の軒下をサッカーボールほどの光の球がスーッと過っていったのです。私は家の中にいた祖母に向かって「おばあちゃん、でっかい蛍が飛んでるよ！」という和祖母は血相を変えて「キヨシ、あれはヒトダマだよ」と言うやいなや私を家の中に引っ張り込んで雨戸を固く締めたのです。私には「ヒトダマ」のモデルがなかったので、すでに持っていたモデルの「ホタル」と認識したわけです。それが「ヒトのタマシイ」であるとか「怖いもの」であるとかの概念がモデル化されていなかったのです（当時も今もそういう意識はないですが、その正体が「プラズマ」であると科学的に解釈する必要もないと思っています。それは興味深い民俗学的事象に他ならないからです）。

また、モデルについては、次男も幼稚園児の時に興味深い発言をしました。普段は、私のことを「お父さん」と呼んでいるのですが、ある時、私が台所で皿を洗っていると私のことを「お母さん」と呼びました。そして絵本を読んでやっているときは「先生」と呼びかけました。これは、私という同一であるはずの素材（対象）をモデルの違いから3通りの存在役割として観ていたことになります。

一般にモデルとはこのように現象世界の混沌（chaos）に意味づけし実体（reality）を構築するためのものですが、それが一度設定されるとその使用者の関心領域の枠外の現象を除外し、それによってモデル自体が自明の存在証明であるかのように働く点に注意することが必要です。つまり、さきほどの「ヒトダマ」のモデルで言えば、ある光の球体という現象を「ヒトダマ」

と(脳内で)認知するや否やそれが「ヒトダマ」として外界に存在することになるわけです。この確信はゆるぎないものであることが多いので、一度成立すると簡単には覆せない信条となります(たとえば「イデオロギー」や「XX原理主義」)。

人間が外界(世界)そのものを認識しているわけではないのに認識していると信じる相手の「錯覚 illusion」によって、またモデルを用いて外界の存在物を確実に把握したと信じる相手の「誤読 misreading (別読 para-reading)」を巧みに利用することによって、その相手に隠謀を仕掛けるアプローチをとることを、隠謀学では、「隠謀主義 plottism」と呼ぶことにします。

(2) 偶然化 ～自然に擬態する

隠謀主義的アプローチでは、相手に「錯覚」し「誤読」してもらうためには、相手にとってそうすることがごく「自然な行為」と信じて疑わないことが不可欠になります。ここでいう「自然」とは慣習に合致していることを意味します。隠謀学では、それを「偶然化 accidentalization」と呼ぶことにします。事故を偶然と解釈すると、それは受け入れないわけにはいきませんね。偶然化では、この効能が発揮されることになります。

例えば、「偶然化」とは「街角で偶然に出会った」ことが実は意図されたことであるような場合をいいます。会社という同僚のいるところでは打ち明けられない気持ちを密かに打ち明けるべく、意中の人をその帰り道の街角で待ち構えていて偶然を装って出会うシーンはテレビドラマでもありうることです。また、ロシアのある工場での事例ですが、しばしば工場から台車を引いて退社する従業員がいました。台車には荷物や製品などは積んでなく空だったため門番の守衛は全く疑いを持ちませんでした。しかし、その従業員は、毎回、空の台車を盗みだしていたのです(JL・ピーコック:1993)。これは偶然化のプロトタイプと言えます。

また相手の意識を偶然化に向かわせるアプローチとして、まず事象にそれらしく「命名」したり「ルール」を定めたりして下準備しておくこともあります。朝日新聞の4コマ漫画「ののちゃん」にありましたが、一見、何の絵かわからない線描に主人公のののちゃんが「ネコ」という題名をつけるとそれらしく見えてきたものです。

また、ロシア革命の際に、レーニンは最初からボルシェビキ(ロシア語で多数派)を名乗りましたが、実際はメンシェビキ(少数派)だったそうです。一般に、人々には、多数決を慣習として受け入れることが多いため、多数派のほうが支持されやすいと考えたのだと隠謀学では推定します。話は変わりますが、10世紀末、赤毛のエイリークは、北大西洋のある無人島を発見し、「氷の島 Iceland」と命名しましたが、その名のためか入植希望者がなかなか現れませんでした。そこで彼はさらに北で発見した大きな島には入植希望者が多数現れることを願い、「緑の島 Greenland」と名付けたという逸話があります。こうした古典的手法は隠謀学的には初歩的なもので、今日のCM(Commercial Message)では、常套手段になっています。つま

り、CM とは元来、隠謀主義的なコミュニケーション手段なのです。

筆者が、30 年ほど前に勤めていた東京の病院でのことです。私は脳神経外科病棟の勤務医でしたが、受け持ちの患者が亡くなると上司からできる限り「ゼク（病理解剖 Sekzion）」をさせてもらうように指示されていました。それには家族から許可をとる必要があります。そこで、肉親を亡くしたばかりの家族に、私たちの医療が役に立たなかったことを詫びつつ、後学のため原因を究明する目的で病理解剖をさせてほしいと願い出るわけです。筆者の場合、それでも家族から許可される割合は5割以下でした。ところが同じ病院の内科医にほぼ10割解剖の許可をもらっている者がいました。そこで、ある時、そのコツを尋ねると、その医者はこう言いました。「なあに、『当院では、亡くなった方には全員病理解剖を受けてもらうことになっています』と言うのさ」と。もちろん、そのような規則はありませんでしたが。

このように、或るルール（照合体系）を提示することでも偶然化は行われます。この典型ともいえるジョークがあります。それは、タイタニック号の逸話として知られているものです。すなわち、タイタニック号が遭難して沈没しかかっているとき、係の船員は救命ボートにまず婦女子を優先的に乗せて救助しようとしています。そこに、助かりたい男たちが次々に現れた時のエピソードです。ともかく船員の獲得目標は、婦女子を優先することですから当面、男性は除外しなくてはなりません。そこで、最初に来た英国人の男性には「あなたはジェントルマンでしょう!？」というと彼は引き下がります。次に米国人の男性がやってきます。彼には「あなたはヒーローになりたくありませんか？」と問い、追い払います。今度はドイツ人の男性がやってきます。彼には「婦女子を優先する規則ですから」と言って退けます。最後に日本人の男性がやってきます。彼には「他の男の方にも遠慮していただいていますので」といって遠ざけるという落ちまでついています。

このように隠謀主義を企図するには、その相手の性格をよく理解しもっともらしいルールのもとに相手を囲い込むことが必要となります。そうしておいて相手が「自然に」それに従って行動することを「未必の故意」的に期待するわけです。

(3) 権威的錯覚化 ～知らしむべからず寄らしむべし

次に隠謀主義の手段としてとられる権威的錯覚化についてみます。これは、筆者の専門領域でもある医学概論（医学哲学・医療思想）に関係が深い、医療・ヘルスケアといった領域での事例がなじみ深いと思います。この場合数値や統計（すなわち数学）がその考え方を裏付ける役割を果たしているのが一般的です。

例えば、斎藤明彦はその問題点を次のように指摘しています（斎藤：1992）。すなわち、「ある集団の66.7%は女性で、構成員会員の平均年齢は21歳である」というとき、その集団はどのような姿なのか（条件が少なくても）明確に示してはいません。にもかかわらず、統計的に語

られる (statically narrative) ことによって、少なくとも数十人の集団をイメージすることは大いにありえます。しかし、斎藤は、その集団とは、実は42歳の母、13歳の息子、8歳の娘からなる3人の母子家庭なのだと種明かしをします。この場合、示された統計は数値的には事実ですが、集団の特徴を表してはいないのです。

このように「数字、%, 小数点, 平均, 偏差値…さらにOK ネームという権威者の名前, * * 学会 [の名]」などの権威的要素によって錯覚化が図られる可能性 (危険性) を取り上げ「すばらしい新薬や驚くべき治療技術が開発されているのにその進歩の程度に応じて病気が減少しないのは統計操作によるものかもしれない。……的確に表現されるかどうかよりもそれ以前に病を数 (統計) で表現しようとする姿勢を見直す」べき旨を斎藤は指摘しています。

医療・ヘルスケアにおける論調・プロパガンダで隠謀主義が表れやすいのは、医療・ヘルスケア (近代西洋医学・現代医学) それ自体が本邦のみならず世界的に権威化済みの点が挙げられます。しかも本邦では、明治7年の医制発布によって、漢方・東洋医学が正統医学の座から引き下ろされて以降、人々は無条件で現代医学に掛かるように日常チャネリングされています。そうした結果、識字率98%以上を誇る国民でありながら、医学的なリテラシーはかなり低く維持されているようですので、なおさら隠謀主義が働きやすいと言えましょう。

ヘルスケアのCMの場面では、各種のサプリメントが「健康に良い」と聞いただけで愛用されています。しかし、まず医学的見地から「健康に良い」とは具体的に何を指す言葉なのか不明です。美肌・長寿に関するサプリメントは、「健康に良い」から「良い」のだといったトートロジー (同義反復) による消費を煽っているようです。例えば、コラーゲンやヒアルロン酸も分子量が大きいのでそのままでは消化吸収されないでしょうし、仮に小腸で吸収されるとしてもより小さな分子量に限られます。しかし、そうして吸収されたコラーゲンやヒアルロン酸の材料は、そのまま飲んだ人の希望通りの場所 (関節・皮膚) に運ばれる保障はないのです。CMは巧みに、吸収前の精度そのほかを語りますが、その薬物が分解され吸収された後の運命は黙して語らずです。多くの人が希望通りの場所に行ってくれるものと信じてそれらのサプリメントを消費しているわけです。これは、隠謀主義の巧妙な一例と言えるでしょう。

日本が全世界シェアの7~8割を使っているタミフルという抗インフルエンザ薬の効能は、風邪症状が例えば0.5日早くなるといったものです。日本人の多くは、病気になったら何の病気でもなにか薬を飲まないと治らないと信じている (あるいは信じ込まされている) ので、風邪が自然に治る病気 (自己限定的 self-limited ; 自然治癒するもの) だといった説明に近頃の患者は納得しません。明朝出張なので、明日までに注射一本で直してくれという患者さえいるほどで、病院に来たのに薬が出ないのは患者にとっては失望なのです。

さて、この0.5日という数字ですが、実は、タミフルを使用した群 (集団) と使用しなかった群の平均値の差でしかないのです。もとのグラフは集団同士がかなり重なっているので実際には、タミフルを飲まなかったある人がタミフルを飲んだある人よりも早く治っている部分も

あるのです。しかし、開業医はこの辺は語りません（この事実を知らないのか、知っていても営業に差し支ええると思って黙すのかわかりませんが）。しかし製薬会社は知っているはずです。この例は、統計結果が独り歩きをしていることを示しています。製薬会社やそれにかかわっている医学研究者は、その独り歩きを（おそらく政治的判断で）黙認しているわけです。

これはまさに統計データを使った権威主義的錯覚化による隠謀主義なのです。このほかにもデータの都合のよい部分のみを提示することで錯覚化を行なうものがあります。例えば、BMIと死亡率の関係を示す棒グラフはしばしばBMI=22をほぼ平均として上方に開いた左右ほぼ対称の形を示します。このグラフの読みは、しばしばBMIが大きいほうの中心から右側だけが強調されます。その結果、周知の肥満度が高いほど死亡率も高いという言説が生まれるわけです。ところがなぜか左側の痩せの部分については語られることがほとんどないわけです。これが意図的かどうかの調査はなされていませんが、肥満学の研究者が、神経性食欲不振症などのごく少数例を除けば、痩せの問題はないかのように見せかけるためだという推測は隠謀学的には可能です。

本川裕の『統計データはおもしろい！』（本川：2010）によれば、「OECD 諸国のうち先進国としての資格が十分な 23 カ国」での成人肥満率（%）と虚血性心疾患［おもに心筋梗塞］死亡率（人/10 万人）のグラフを見ると男女とも米国が肥満度も死亡率も最も高いほうに位置しているのに日本は肥満率も死亡率も再開になっていて、肥満率は米国の約 10 分の 1、死亡率は男で 7 分の 2、女で 4 分の 1 と低くなっています。同じく 23 各国の別のグラフでは、肥満要因のうち過食による肥満の要素は日本は米国より 6 分の 1、運動不足による肥満の要素は 9 分の 1 となっています。こうしたデータは、厚生労働省の下部組織が毎年出している『厚生 の指標』には決して出てこないようなデータです。すなわち、日本は、先進国の中では決して肥満国ではないということを示すデータなのです。

ところが、肥満の国際基準は BMI=30 以上なのに、厚労省、日本肥満学会など日本の「生活習慣病－メタボリック・シンドローム」の推進団体は、それに負けじと肥満率を増やすべくなのか BMI=25 以上を肥満としています。メタボリック・シンドロームでも、高血糖、脂質異常、高血圧などの境界が正常値すれすれに取る［正常と異常の中間地帯のいわゆるグレーゾーンが全くない］程に厳しくして食生活や運動療法に気をつけるよう国民に迫っています。

なぜ国家が中心となってそういうことをやるのかについて、性善説では国家が国民の健康増進に腐心してくれているということになるのでしょうか。しかし、性悪説の隠謀学では違います。そのヒントは『今日の治療薬』などの「治療マニュアル」（『今日の治療薬』：2011）に書かれています。つまり、糖尿病、高脂血症（脂質異常）、高血圧では最長でも 3 カ月ほど生活習慣の改善（食事・運動療法など）をしても検査数値が改善されなければ薬物療法を開始することとなっているのです。3 カ月ほどで生活習慣が改善できるかという点も疑問ですが、仮にそうできたとして数値が正常値に変わる保証はないのです。要するに、「病気の判定基準」を緩く

して運悪く網にかかってきた人々を患者に変え、薬物治療を開始するというのが最終目標であるというのが、隠謀学的判断です。その結果、製薬産業は潤い、厚労省の意図？とは違って医療費は増大するという試算がなされています（「薬のチェック」：2011）。実際、厚労省の調査でも70歳以上の高齢者の約50%が降圧剤を飲まされる結果となっています（村岡：2012）。

私見（隠謀学的見解）では、日本の高齢者は、いくつになっても健康不安を持つような時代に生きていて、そのため健康になろうとして平均10〜7種類くらいの薬を大半の人が飲まされています。彼らが大過なく大した問題を起こしていなさそうなのは、ひとえに日本の高齢者が、飲まれた大量の薬をその丈夫な肝臓や腎臓で無事に代謝し体外に排泄しているからだと考えるのが妥当でしょう。

一方、メタボリック・シンドロームや生活習慣病の人々に与える風評被害はひどいもので、高齢者が「コレステロール」という体内に必要で不足すると免疫力が低下したりする物質をけ毛嫌いするようになり、必要なたんぱく質を控えて健康問題を起こす危険性が挙げられます。

また、さらに若い女性にも「肥満恐怖症」を惹起させています。その結果、先ほどのいわゆる先進国の比較と同様の国際比較で、日本の痩せすぎ（BMI 18.5未満）の比率は、一人あたりのGDPがほぼ同じの先進諸国群の3〜4%に対し、12.2%と高いことが示されています（本川：2010）。このことは言うまでもなく、若い女性に摂食障害やうつ傾向、骨密度の低下、子宮の成熟異常などを引き起こすことが懸念されています。

(4) お わ り に ～世界は誰のために存在するの？

以上、隠謀学について、事例を踏まえながら紹介してきました。CMや医療・ヘルスケアに代表されるような領域に出没する隠謀主義的言説を私たちが見抜くことができるならば、今日よりも明日はよりよい生活を生きることが可能になるでしょう。

私が最初に隠謀主義に興味を持ったのは、食卓で使う「味の素」の瓶の振り口の穴の大きさを確か3倍くらいに大きくし穴の数も3倍に増やしたら消費量が上がったという話を聞いた時でした。ここ10年くらいでは、家庭から固形せっけんが減少し、シャンプーのように容器に入れて押し出して使う液状せっけんに駆逐されるような勢いです（我が家は相変わらず固形石鹸も愛用していますので、消費量はさほど増えていませんが）。

またある会社が家庭のトイレで尿糖を測れるテープを売り出していますが、これも、病院で血糖値を中心に測るようになって不要になったものの再利用と言えるでしょう。しかし、血糖値が200mg/dlくらいにならないと尿糖は（+）陽性にならないので、多くの人が使ってもマイナスになるのが当たり前ですから、無意味な代物と隠謀学的には言えます。これも性善説では、毎日家庭で健康を確かめられるから便利だということになるでしょう。

問題は、私たち一人一人の選択ということになります。隠謀学的に考えるならば、そういう

選択の結果、誰が最大利益を得たかをシミュレーションする推理小説やサスペンスドラマで隠謀主義についてトレーニングを積むこともできるでしょう。世界の出来事は偶然に生起しているとみなすよりも、なにか世界には意味があると常時考えるのが隠謀学的営為となります。この世界は劇場であるとシェークスピアが言ったとすれば、世界舞台にはさまざまなアクターが登場するわけですが、しかし、大別すると隠謀学的には性悪説的「名優」と性善説的「大根役者」という、たった2種類の俳優で演じられていることになります。

〔引用文献〕

- 「薬のチェック」：2006年，NPO 法人医薬ビジランスセンター『薬のチェックは命のチェック』（季刊誌）第24号，8-11，24-28頁
- 今日の治療薬：2011年，浦部昌男ほか編『今日の治療薬 2011』南江堂，332-335，365，554-556頁
- 斎藤明彦：1992年，「医療統計」，医療人類学研究会編『文化現象としての医療』所収，メディカ出版，276-279頁
- スタイン，G：2000年，『だましの文化史』紀伊国屋書店，4頁
- ピーコック，JL：1993年，『人類学とは何か』（今福龍太訳）岩波書店，38頁
- 本川 裕：2010年，『統計データはおもしろい！（相関図でわかる経済・文化・世相・社会情勢のウラ側）』技術評論社，14-19，133-136，206-209頁
- 村岡 潔：2012，「『生活習慣病』の正体をさぐる」，井上芳保編著『健康不安と過剰医療の時代（医療化社会の正体を問う）』所収，68-94頁
- ユクスキュル，クリサート：2003年，『生物から見た世界』岩波文庫，1-40頁

（むらおか きよし 社会福祉学科）

2012年10月31日受理